

「心に太陽を持って」足利文林第74号、2011年春号、足利文林会2011年5月28日刊を読む

心に太陽を持って

3月11日東日本巨大地震・津波が発生して、はや1ヶ月が過ぎました。連日テレビや新聞で伝えられている悲惨な状況は目を覆うばかりです。日本中、悲嘆と絶望に打ちひしがれています。

さらに原子力発電の事故は科学技術の安全神話が根本から崩され、人間の驕りと欲望に対する神からの啓示であるとも思えます。

一方この事態にたいして節度と忍耐ある日本人の行動にたいして世界から賞賛の声も伝えられています。

恐怖と悲嘆に明け暮れている自分は、子供の頃日本が戦争に負けた日のことを思い出し絶望と先が見えない閉塞感の中でその頃教科書にのっていた一編詩を何度も何度も読んでいたことを思い出しました。

心に太陽を持って。

あらしが ふこうと、
ふぶきが こようと、
天には黒くも、
地には争いが絶えなかりうと、
いつも、心に太陽を持って。

くちびるに歌を持って、
軽く、ほがらかに。
自分のつとめ、
自分のくらしに、
よしや苦勞が絶えなかりうと、
いつも、くちびるに歌を持って。

苦しんでいる人、
なやんでいる人には、
こう、はげましてやろう。
「勇気を失うな。
くちびるに歌を持って。
心に太陽を持って。」

フライシュレンによる

P79

[コメント]

春夏秋冬と、毎年 4 回発行される足利文林の 74 号。3.11 などどんなことがあってもめげずに、「心に太陽を持ち」がんばるしかない。そう強く感じました。

- 2011 年 5 月 22 日 林 明夫記 -